III章　夏休みの行動

この章では、夏休みという長期休暇ならでは、の中学生の行動をテーマとしている。具体的には、旅行やキャンプなどに行った経験の有無と日数、水泳に代表されるスポーツの経験度、外出に関する決まりの遵守度や逸脱的行動の経験――これらを中学生にたずね、学校がある日常の生活との比較も一部加えながら、夏休み中の中学生の行動の足跡を追ってみた。

(1) 外　出

1 経験率

まず夏休み中の外出として頻度が高いであろうと想定されるものを6項目あげ、そのような外出をどれだけしたか、日数または回数をたずねた。図III－1は、「外出をどれだけしたか」という質問の回答を記入の有無で分けて経験率を出し、さらに記入有りの場合、日数または回数の平均値を算出したものである。

回答によると、経験率は高い順に①買い物68.3%、②部活動56.6%、③家族で食事54.3%となっており、この3項目については半数以上の生徒が、夏休み中に少なくとも1回は経験をしている。次いで④ハイキングやキャンプ、⑤映画やコンサートはいずれも経験率が32.0%程度でおよそ3人に1人が経験している。⑥美術館や博物館は8.0%で、10人に1人以下の割合であった。

経験者の日数または回数の平均値は概して高く、少ないもので約2回、多いものでは(学校の課外活動であるクラブを除いても) 5回近くになる。またこの平均値は、いずれも女子より男子のほうが高い。

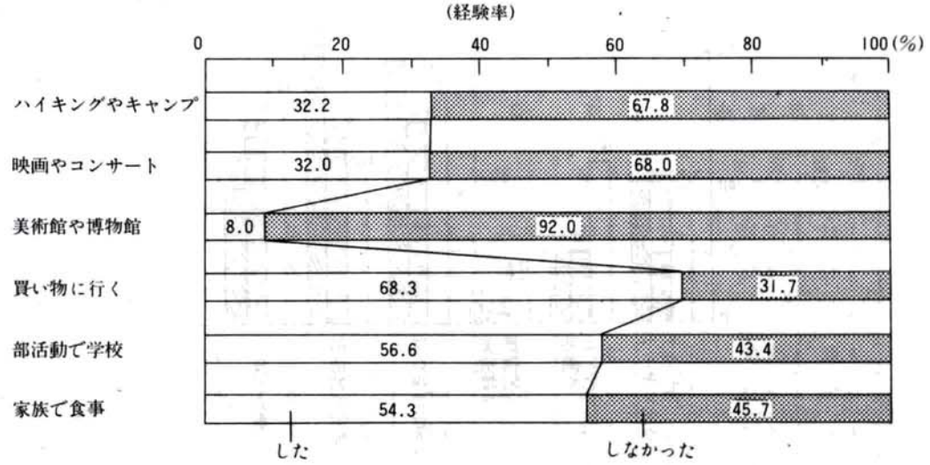
続けて、経験率を属性別にみてみよう。

成績別にみると(表III－1)、おしなべて下位層の経験率が低い。もっとも高い成績層との間では、「買い物に出かける」という1項目を除き、10%前後 (8.5%～13.5%) の差が出ている。

地域別の経験率を図III－2に示したが、項目によりかなりの地域差がみられた。映画やコンサート、美術館に行った割合が、都市部では地方2地域の2倍以上になっている。都市部ではそのような施設や機会が地方に比べると圧倒的に多いためであろう。

それに対し、郡部では部活動の割合が84.2%と大変高くなっている。しかも回数別にみると、そのうち56.3%が5回以上と答えている(1回6.7%、2回10.3%、3回10.3%、4回16.4%、5回37.0%、6～10回16.9%、11回以上2.4%)。郡部の夏休みは期間が20日間余りであることを考えると、郡部の中学生はかなり部活熱心型の夏休みを過ごしたと言える。地方市街地は、目立った特徴は見受けられないが、やはり部活熱心型がやや多い。

〔図III-1〕外出をどれだけしたか



平　均　値

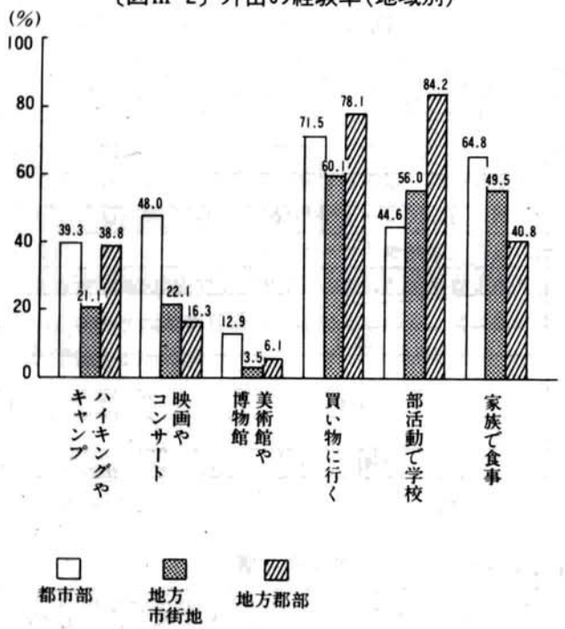
	全　体	男　子	女　子
ハイキングやキャンプ	3.97	4.10	3.82
映画やコンサート	1.95	2.15	1.74
美術館や博物館	1.99	2.14	1.83
買い物に行く	4.80	4.98	4.65
部活動で学校	5.78	6.18	5.42
家族で食事	3.09	3.14	3.05

〔表III-1〕外出の経験率（成績別）

(%)

	上　位	中　位	下　位
ハイキングやキャンプ	42.3	33.1	28.8
映画やコンサート	37.3	33.3	28.8
美術館や博物館	(11.3)	0.7	0.8
買い物に行く	69.7	68.7	67.4
部活動で学校	58.5	61.0	52.2
家族で食事	(62.7)	55.0	51.5

〔図Ⅲ-2〕外出の経験率(地域別)



2 一緒に行動した人

それでは、以上のような外出行動を誰と行ったのだろうか。今まで見てきた各項目について、同行者を回答してもらった結果が表Ⅲ－２である。ただし「部活動で学校」、「家族で食事」、の２項目については設問を設けていない。

同行者は、「映画やコンサート」では友人が65.6%と圧倒的に多く、それ以外の項目では家族と同行する割合が高い。また男子と女子を比べた場合、男子は女子よりも１人で行動する傾向が強い。例えば、「映画やコンサート」に１人で行くと答えた割合は、男子で17.2%なのに対し女子では2.9%、「買い物」は男子で33.6%なのに対し女子では19.0%、という結果がでている。

地域別にみると、都市部と地方郡部では大きな違いがある。すなわち、４項目のうち３項目において、家族と行く割合と友人と行く割合が、表Ⅲ-３のように逆転している。

都市部は「ハイキングやキャンプ」以外では友人と行動する率が高く、反対に地方郡部では家族と行動する率が高い。これはやはり地域性であろう。都市部の中学生は映画やコンサートには気軽に行けるが、自然の豊かなところに住む郡部の中学生にとっては、むしろハイキングやキャンプのほうが手軽な楽しみといえよう。いずれの地域でも近距離のところへは友人と、遠方へは家族と一緒に出かけるので、このような違いが出たと考えられる。

地方市街地のデータの傾向は、どちらかといえば都市部に近い。

また成績別には、あまり目立つ差はない。

〔表Ⅲ－２〕 一緒に行動した人(複数回答)

		全体	性別		地域別		
			男子	女子	都市部	地方市街地	地方郡部
ハイキングやキャンプ	家族と	52.3	51.0	53.9	54.1	64.3	34.1
	友人と	35.3	34.8	35.8	33.9	24.5	51.2
	1人で	4.4	4.5	4.2	7.1	1.0	2.4
	その他	29.5	22.8	31.5	31.7	20.4	35.4
映画やコンサート	家族と	28.1	23.6	32.6	24.7	22.9	60.5
	友人と	65.6	58.6	72.6	69.8	71.9	26.3
	1人で	10.0	17.2	2.9	13.0	2.1	13.2
	その他	10.0	10.9	9.1	8.8	13.5	7.9
美術館や博物館	家族と	40.7	39.1	42.6	38.2	41.7	50.0
	友人と	24.6	21.9	27.8	27.6	20.8	16.7
	1人で	15.3	17.2	13.0	14.5	8.3	27.8
	その他	24.6	25.0	24.1	25.0	33.3	11.1
買い物に行く	家族と	60.3	50.5	68.3	47.5	65.7	79.4
	友人と	40.5	31.5	47.8	51.9	39.4	17.4
	1人で	25.6	33.6	19.0	37.1	17.1	14.2
	その他	6.7	6.9	6.6	7.1	7.2	5.2

〔表Ⅲ-3〕一緒に行動した人の違い

(%)

行く先	同行者	都市部		地方郡部
ハイキングやキャンプ	家族と	(54.1)	>	34.1
	友人と	33.9	<	(51.2)
映画やコンサート	家族と	24.7	<	(60.5)
	友人と	(69.8)	>	26.3
買い物に行く	家族と	47.5	<	(79.4)
	友人と	(51.9)	>	17.4

(2) 旅　行

夏休みに旅行に行った者に対し、どこに誰と行ったかをフリーアンサーで答えてもらった。なお、旅行は調査地域により起点が異なり、全体での集計はあまり意味がないと思われたので、本調査では地域・学校別に50サンプルを抽出して粗集計した。その結果が表Ⅲ－4である。

1行き先

表にみるとおり、都市部調査校4校はどこも似た傾向を示している。ベスト3は①静岡(伊豆半島が多い)、②長野（日本アルプスや付近の高原地帯が多い)、③神奈川、の順になっている。少数派も含めると行き先はほとんど全国に散らばっており、海や山へ、また親戚をたずねて、各地に出かけている様子がうかがわれる。なお、海外に出かけた中学生も3名いた。3名とも住宅地にあるA校の生徒で、それぞれ韓国、シンガポールとオーストラリア、アメリカに出かけている。

地方2地域は両地域とも長野県下にあるので似た傾向を示し、市街地では①新潟・長野、③埼玉ほか2地域、郡部では①長野、②新潟、③東京、の順になっている。何よりも、長野県自体が5つの国立・国定公園を有するほど美しい自然に恵まれた日本の代表的観光県であることが、大きく影響していよう。またこの2地域は、都市部に比べると交通の便が限られるためか、旅行先の散らばりが少ない。

2同行者

どの地域でも、家族全員で旅行に出かける割合が圧倒的に高い。次いで家族の誰か、友人あるいは親戚、の順となる。

3日数

都市部では、3～5日程度がほぼ主流と言える。地方2地域は日帰り～3日までが多くなっており、都市部よりもやや短い。

地域別に両親の就業状況をみると、都市部の父親は自営業が多く、母親はパート、専業主婦の割合が高い。一方の郡部では父親は農林業、母親は勤めまたは農林業が多い。このような就業状況が、夏休みの期間とともに、旅行日数に影響していると考えられる。

〔表Ⅲ－4〕　夏休みの旅行

N＝50

		行き先		同行者		日数	
都市部	A校（住宅地）	1．静岡	6	1．家族全員	23	2日間	4
		長野	〃	2．家族の誰か	12	3〃	15
		3．千葉	3	3．友人	4	4〃	7
		茨城	〃			5〃	4
		富山	〃			7〃	7
	B校（商業地）	1．静岡	7	1．家族全員	29	日帰り	3
		長野	〃	3．家族の誰か	8	2日間	3
		3．埼玉	5	3．家族と親戚	4	3〃	11
		4．群馬	4			4〃	4
		5．神奈川	3			5〃	8
						7〃	3
	C校（商業地）	1．静岡	8	1．家族全員	24	日帰り	4
		2．神奈川	7	2．家族の誰か	7	2日間	8
		3．栃木	6	友人	〃	3〃	14
		4．千葉	5	1人	〃	4〃	16
		5．長野	3			5〃	6
		茨城					
	D校（商業地）	1．長野	7	1．家族全員	21	日帰り	4
		2．静岡	4	2．家族の誰か	7	2日間	6
		3．神奈川	3	3．友人	2	3〃	11
		福島	〃			4〃	3
		5．埼玉	2			6〃	3
		新潟	〃			7〃	3
		山梨	〃				
地方市街地E校		1．新潟	3	1．家族全員	12	日帰り	6
		長野	〃	2．家族の誰か	6	2日間	4
		3．埼玉	2	3．親戚	1	3〃	5
		兵庫	〃	友人	〃	4〃	5
		北海道	〃	1人	〃	5〃	4
地方郡部	F校	1．長野	6	1．家族全員	10	日帰り	8
		新潟	〃	2．親戚	4	2日間	5
		3．東京	4	3．家族の誰か	2	3〃	9
		4．神奈川	1				
		富山	〃				
	G校	1．長野	7	1．家族全員	6	日帰り	5
		2．新潟	2	2．家族の誰か	2	2日間	2
		3．千葉	1	3．親戚	1	3〃	2
		岐阜	〃	村の人	〃	4〃	1
				1人	〃	7〃	1
	H校	1．長野	9	1．家族全員	14	日帰り	11
		2．新潟	5	2．家族の誰か	3	2日間	8
		3．東京	2	3．親戚	2	3〃	4
		4．富山ほか各地	1	友人	〃		
				1人	〃		

アンダーライン部分＝最頻値

(3) スポーツ

プールや部活、習いごととしてのスイミングスクールなど5項目をあげて、夏休み中どんなスポーツをどの程度したか、をたずねてみた。回答から「とてもよくした」「まあよくした」の数値を合計して表にまとめたのが、表Ⅲ－5である。

1 全体的に見て

よくした割合がもっとも高いのは「部活動」で、「とてもよくした」だけで39.4%、「まあよくした」を含めると60.4%に及ぶ。次は「プール」で35.3%、残る3項目（「スクール・習いごと」・「旅行中にスポーツ」・「公園などで運動」）は10～16%であまり高くはない。

2 属性別

性別にみると、「部活動」で女子の割合が高く、「プール」・「旅行中にスポーツ」・「公園などで運動」の3項目で男子の割合が高い。

地域別にみると、図Ⅲ－3のようにかなりの差がある。都市部では「部活動」・「公園などで運動」の割合が低く、郡部の半分以下であり、逆に「旅行中にスポーツ」・「スクール・習いごと」の割合が郡部の2倍以上になっている。

地方2地域では、学校の部活動が夏休みの大きな要素になっている。また、旅行の経験率は不明だが、旅行中のスポーツの数値には、この経験率が反映していよう。「スクール・習いごと」をした割合は、その種の主催団体や主催者の多い都市部では、地方2地域に比べて高率になっている、と考えられる。かなり地域性を反映した結果が出た。

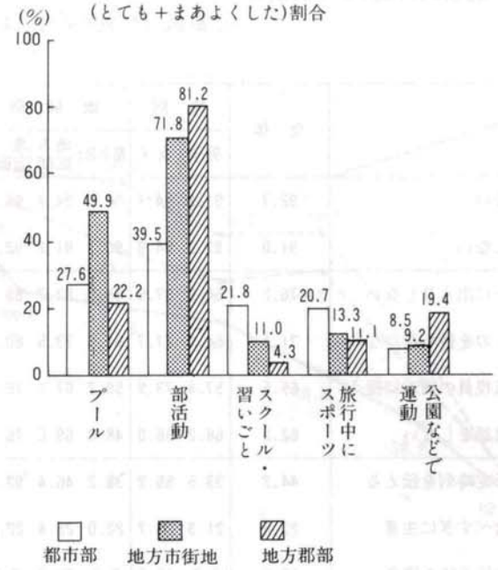
成績別にみると、上位層と下位層の間に5～14%の差があり、下位層のスポーツ活動率の低さが目につく。

〔表Ⅲ－5〕 夏休みのスポーツ（とても＋まあよくした割合）

(%)

	全体	性別		地域別			成績別		
		男子	女子	都市部	地方市街地	地方郡部	上位	中位	下位
部活動をした	60.4	57.6	63.4	39.5	71.8	81.2	61.8	65.1	55.3
プールに行った	35.3	38.9	31.5	27.6	49.9	22.2	44.9	36.0	30.4
旅行中にスポーツをした	16.2	18.5	13.6	20.7	13.3	11.1	21.0	16.9	14.8
スクール・習いごと	14.5	13.2	15.9	21.8	11.0	4.3	17.0	15.5	11.9
近くの公園などで運動した	10.9	13.9	7.7	8.5	9.2	19.4	15.7	9.9	10.4

〔図Ⅲ-3〕 夏休みのスポーツ（地域別）



(4) 逸脱的行動

この調査の前に、都内の中学校数校にご協力をお願いして「夏休みの栞」を頂戴し、各校が夏休み前、生活面を中心にどのような生徒指導をしているのかを、ある程度つかんだ。そして指導事項を9項目にまとめ、それらを中学生がどのくらい守っているか、たずねてみた。その結果が表Ⅲ－6である。

表をみると、守った割合に大変ばらつきの出ていることがわかるが、大きくは次の3つのレベルに分けることができる。

①9割以上の生徒が守っているレベルのものとしては、「バイクに乗らない」「アルバイトをしない」の2項目があげられる。どちらも、社会的なルールとして中学生には禁止されていることであると、中学生自身が認識している項目といえよう。

②だいたい（6～8割）の中学生が守っているレベルでは、「ゲームセンターや盛り場には出入りしない」など4項目があげられる。これらも、なかば規範化していることであろう。

③半数以上の中学生が守らないレベルでは、家庭のしつけともいえる2項目と生徒手帳の携帯があげられる。生徒手帳の携帯は多くの学校で指導していることながら、実際には中学生の身についていないようだ。

〔表Ⅲ－６〕 逸脱的行動(守った割合)

(%)

	全体	性別		地域別			成績別		
		男子	女子	都市部	地方郡部	地方市街地	上位	中位	下位
バイクに乗らない	92.7	91.2	94.1	90.0	94.1	95.8	89.1	96.1	90.0
アルバイトをしない	91.0	87.3	94.9	90.1	91.2	92.7	81.8	94.0	90.8
ゲームセンターに出入りしない	76.2	64.9	87.9	65.0	82.2	89.1	72.5	82.5	70.4
大金や高価なものを持ち歩かない	71.1	64.8	77.7	61.8	73.5	80.8	64.2	75.3	69.8
海やプールで監視員の指示に従う	65.5	57.4	73.9	59.2	67.1	76.4	60.2	69.7	63.2
夜９時以降の電話をしない	62.2	68.2	56.0	48.8	69.6	76.7	61.2	67.5	56.2
行き先・帰宅予定時刻を伝える	44.2	33.5	55.2	38.2	46.4	53.2	43.5	49.3	39.2
冷たいものの食べすぎに注意	23.4	21.3	25.7	22.0	25.4	22.8	25.5	24.5	21.1
外出するとき生徒手帳を携帯	12.6	8.7	16.6	7.3	20.7	7.3	13.3	13.1	11.0

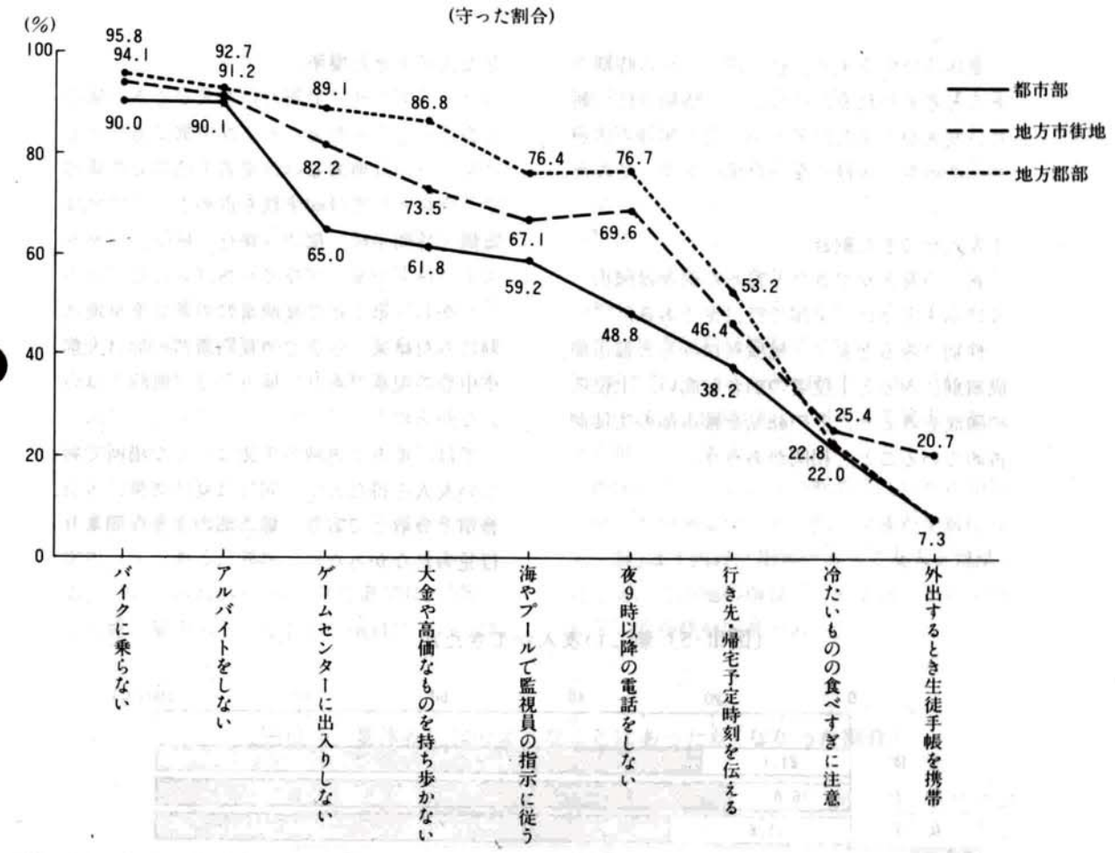
性別にみると、「夜９時以降の電話をしない」以外の項目では、すべて女子の数値が男子より高い。特に「ゲームセンターに出入りしない」「行き先・帰宅予定時刻を伝える」の２項目では、20%以上の顕著な差が出ている。女子のほうが指導に対し従順であるといえる。

地域別にみても、図Ⅲ－４に示すように、差が出ている。全体で９割の遵守率があった２項目と「冷たいものの食べすぎに注意」を除いては、全般的な傾向として郡部の遵守率が高く、市街地は中くらいで、都市部は低い。

都市部では、学校の所在地自体が盛り場と目される地域に隣接しているケースもある。一方郡部の調査地域は、最寄りの鉄道の駅から10～20キロくらい離れている。それぞれの環境により、中学生の行動範囲、守るように指導される事項、規範感覚なども異なっているものと考えられる。

成績別にみるとあまり大きな差はないが、中位層の遵守率が高い。これは、サンプルを属性別に分析すると中位層には女子が多いので、その影響と考えられる。

〔図Ⅲ-4〕 逸脱的行動(地域別)



⑸ 新しい友人

夏休みは中学生の行動半径が広がる時期であると考えられる。そのような時期を経て新しい友人ができたかどうか、交友関係の広がり、そのきっかけとなった場所を探ってみた。

1 友人ができた割合

新しい友人ができたと答えた割合は図Ⅲ－5に示すように、全体で21.1%である。

性別にみると女子、地域別にみると都市部、成績別にみると上位者の割合が高い。上位者の構成をみると、その48%を都市部の生徒が占めていることと相関があろう。

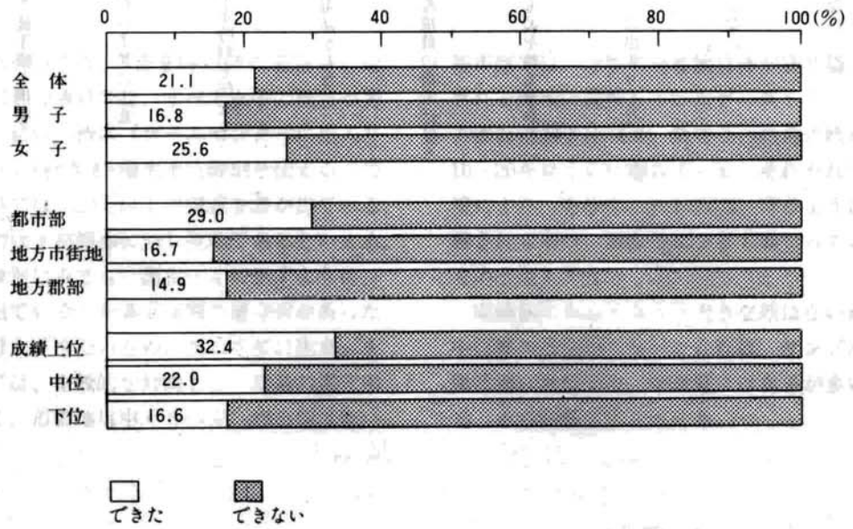
2 友人ができた場所

フリーアンサーで新しい友人ができた場所を書いてもらったところ、都市部でもっとも多かったのは塾あるいは業者主催の夏期講習で、割合としては約半数を占める。その他は臨海・林間学校、部活、旅行、病院、ファーストフードショップなどがあげられた。

しかし、第Ⅰ章で夏期講習の参加率を地域別にみた結果、中2での夏期講習参加は大都市中心の現象であり、地方では一般的とはいえなかった。

では、地方2地域の生徒はどんな場所で新しい友人を得たのか。回答は夏期講習、大会、合宿と分散しており、都市部のような固まりは見られなかった。

〔図Ⅲ-5〕新しい友人ができたか



⑹ 活動・コミュニケーションの広がり

ここでは、中学生が夏休みに友人との外出やおしゃべりをどの程度したか、また、それはふだんと比べて多かったか少なかったか、をたずねた。つまり、旅行などとは違った側面から、中学生の日常の活動やコミュニケーションの広がり（場合によってはその反対もある）を追ってみようという意図であ。

項目としては、電話・外出（夜の外出も含める）・夕食・町内行事への参加をあげ、それらが（経験として）どのくらいあったか、その回数と、ふだんとの比較をたずねた。

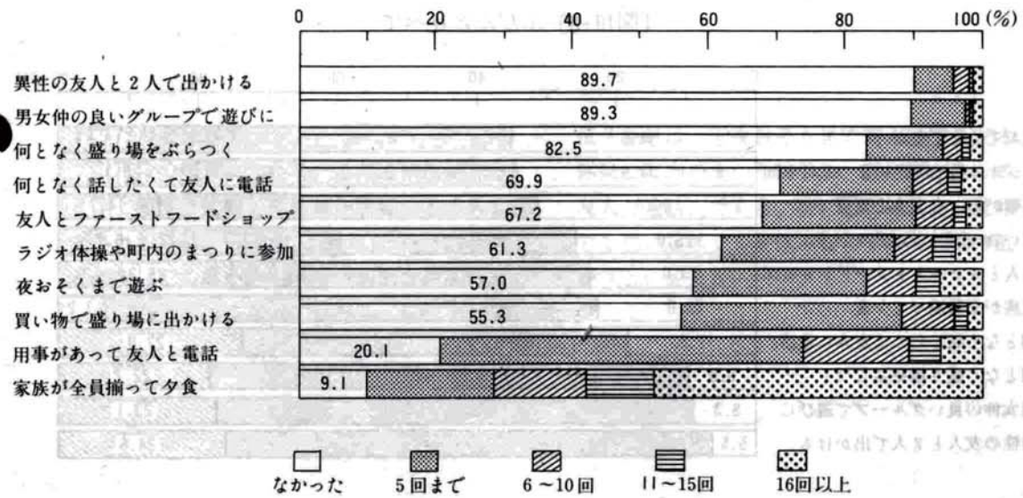
1 経験率

まず各項目の発生頻度を全体的にみたのが、図Ⅲ－6である。「異性の友人と2人で出かける」「男女仲の良いグループで遊びに」「何となく盛り場をぶらつく」の3項目については、8割以上が「なかった」と答えている。また、「家族が全員揃って夕食」以外の項目では、どれも経験は5回まで、という生徒がもっとも多い。しかし、なかには少数だが16回以上、つまり2、3日に1回の割合で経験をしている生徒もみられる。

次に全体を経験ありとなしとで分け、なしの割合と、ありの場合の平均回数をまとめてみた。平均回数は概算で「なかった」→0、「5回まで」→3、「6～10回」→8、「11～15回」→13、「16回以上」→18として算出したのが表Ⅲ－7である。

地域によって夏休みの期間も20日から40日とひらきがあるが、その間「家族が全員揃って夕食」は4回弱、「用事があって友人と電話」は2回、その他の項目は1～2回、というのが平均的な経験回数である。

〔図Ⅲ-6〕夏休みに次のようなことはあったか（なかった割合）



〔表Ⅲ-7〕夏休みに次のようなことはあったか

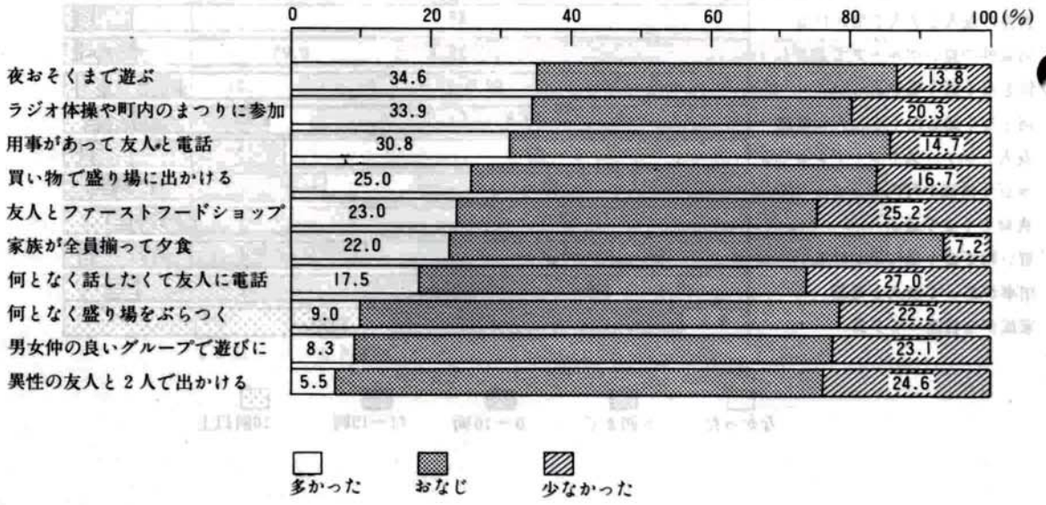
	「経験あり」の平均回数			経験なし(%)		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
家族が全員揃って夕食	3.71	3.60	3.82	9.1	11.3	6.9
用事があって友人と電話	2.25	2.11	2.40	20.1	26.5	13.5
夜おそくまで遊ぶ	1.78	1.82	1.73	57.0	54.2	59.8
買い物で盛り場に出かける	1.65	1.65	1.65	55.3	55.0	55.7
ラジオ体操や町内のまつりに参加	1.64	1.61	1.68	61.3	64.2	58.3
友人とファーストフードショップ	1.51	1.54	1.48	67.2	67.8	66.6
何となく話したくて友人に電話	1.50	1.30	1.70	69.9	80.5	59.0
何となく盛り場をぶらつく	1.29	1.35	1.24	82.5	80.7	84.4
異性の友人と2人で出かける	1.19	1.22	1.16	89.7	89.1	90.3
男女仲の良いグループで遊びに	1.18	1.19	1.17	89.3	88.9	89.7

なお、男女で性差が顕著に現れているのは、表中にアンダーラインを付した通り電話に関する項目で、圧倒的に女子の経験率が高い。

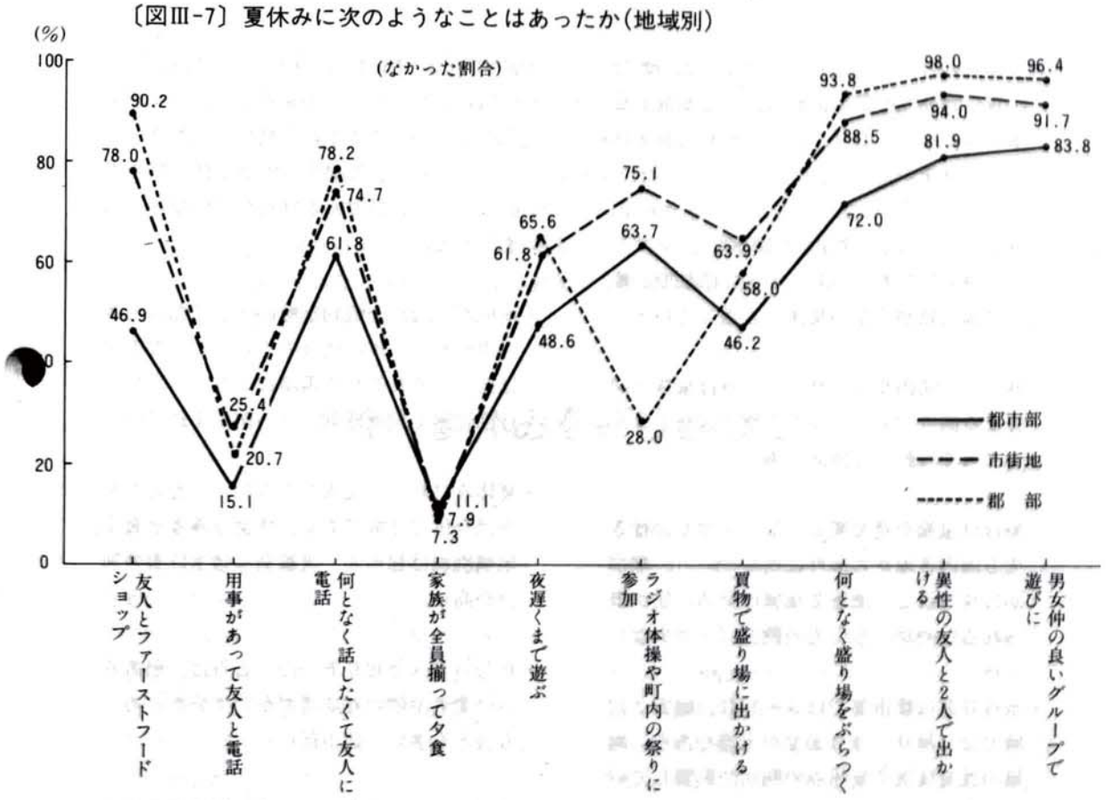
地域別にみると、やはり地域の特色や学校の立地条件を反映した結果になっている（図Ⅲ－7）。特に目立つのは、郡部で「友人とファーストフードショップ」の経験率が都市部の約5分の1と低いこと、「ラジオ体操や町内のまつり」の経験率が逆に大変高いことである。

成績別にはあまり大きな差は見られない。

〔図Ⅲ-8〕ふだんと比べて



〔図Ⅲ-7〕夏休みに次のようなことはあったか(地域別)



2ふだんと比べて

これらの項目について、ふだん学校があるときと頻度を比較した結果が図Ⅲ－8である。全体としては、「ふだんと同じ」という割合がどの項目でも高い。「多かった」割合が高い上位3項目は、①夜おそくまで遊ぶ、②ラジオ体操や町内のまつりに参加、③用事があって友人と電話、である。特に①②は、良い意味でも悪い意味でも夏休みならではの活動の広がりといえよう。

(7) まとめ

・夏休みの外出で全体的に経験率が高いのは①買い物68%、②部活動57%、③家族で食事54%となっており、おしなべて成績下位層の経験率が低い。

・外出からみると、都市部は映画、コンサート、美術館などイベント・文化活動型、地方は部活動熱心型の夏休みを送っている。

・外出は、映画やコンサート以外は家族と同行する割合が高い。また、男子は女子よりも１人で行動する傾向が強い。

・旅行は家族全員で楽しむ割合が高く、行き先も国内各地から海外に及んでいる。都市部に比べると、地方２地域は交通の便が限られるためか、旅行先の散らばりが少ない。

・旅行日数は都市部では３～５日、地方２地域では日帰り～３日までが主流である。両親の就業状況や夏休みの期間が影響していると考えられる。

・夏休み中よくしたスポーツは、部活動（60%）とプール（35%）で、部活動では女子の割合が高く、プールでは男子の割合が高い。

・都市部では旅行中のスポーツやスイミングスクールなどの習いごとがさかんであるのに対し、地方のスポーツは部活動が中心になっている。

・夏休み前の生徒指導事項の遵守状況には、事項によりバラツキが見られる。「アルバイトをしない」のように９割の生徒が守っているものから、「外出するとき生徒手帳を携帯」のようにほとんど守られていないものまである。

・地域別には、全般的な傾向として郡部の遵守率が高く、市街地は中くらいで、都市部は低い。それぞれの環境により、中学生の行動範囲や規範感覚の違いが生まれている。

・夏休みに新しい友人ができた、と答えた割合は全体で２割である。性別にみると女子、地域別には都市部、成績別には上位者の割合が高い。

・新しい友人と知りあったところは、塾あるいは業者主催の夏期講習が約半分を占め、もっとも多い（都市部）。

・夏休みに入ってふだんより行動の頻度が高くなったものは、①夜おそくまで遊ぶ、②ラジオ体操や町内のまつりに参加、③用事があって友人と電話、の順である。

・日常の活動やコミュニケーションのなかでは、電話に関する項目で女子の経験率が男子のそれを圧倒的に上回っている。